

優秀賞

大きな一歩の原動力

神奈川県 桐蔭学園中学校女子部 三学年

鈴木 華子

私は、来年の正月を父と過ごせないそうだ。夏休みも終わりに近づいた頃、父本人からそう告げられた。長年患っていた肺ガンが脳に転移し、薬の効果も長くは続かない。その事実は頭では理解できるのだが、どうも心が追いつかなかった。今日は暑いね、それと同じ雰囲気は何気なくそのことを伝えた父は、いつも通りの父だった。大変なときでも、悲しんだり怒ったりすることなく微笑んでいる。口数は少なく、事実しか話さない父。そんな父が発したとは思えない非現実的な言葉を、私は受け止めることができなかつたのだ。

私は「あ、そうなの。」という一言だけ残り、自分の部屋に戻った。体の底から熱いものが込み上げ、私は泣いた。力が抜け、床にへたりこんで何度も何度も壁を叩いた。父には聞こえていたのだろうか？わからない。父は私に話して後悔しているのだろうか？わからない。唯一わかることは、父と過ごせる時間が少ないということだけ。でも、それさえもどう過ごして良いのか分からない。数日間は何も考えることができなかった。

そんな私に、考えるきっかけを与えてくれたのは、郵便受けに入っていた一通の封筒だった。父宛ての生命保険会社からの書類。父が取り寄せたのだろうか。「保険」という言葉で、父がいなくなっても私たちは生き続けるといふ実感が湧き始めた。父が、私たちの未来のことまで考えていてくれることもわかった。今まで考えてもいなかった保険という言葉が身近になった。父がいらない世界、私にはまだ想像することはできない。しかしそうなってしまつてからでは間に合わないこともあるのだ。保険について詳しくなろうと思うと、それは同時に父のいない生活を考えることにもなる。でも、その道は避けては通れないのだ。

保険について、わかつたことがある。今まで父が払っていたお金は、誰かを助けるために使われていた。そして今回、大勢の人が今払っているお金で、私たちが助けられるのである。それを理解して、親をなくす子供が私だけではないことに気付いた。日常が壊れてしまった人を、皆で支えるものが「保険」というものなのだ。私は、父との残された時間をどう過ごすべきなのか少しわかつた気がした。無口な父、おしゃべりな母、そして私。大勢の人に支えられて成り立つ日常を、しっかりと地に足をつけ、家族で過ごすことが幸せなことなのだ。今度、父と生命保険について、将来について話してみようと思う。

第55回中学生作文コンクール

未来のことなんて、誰にもわからない。でもきっと誰かが支えてくれるのだ。そして、私もいつか誰かを支えるのだろう。
私は、夏の香りの残る空気を思い切り吸い込み、未来へ大きく一步を踏み出した。